

ARC作成：主要経済指標の天気マップ

	四半期別推移												月別推移		
	2001年			2002年			2003年			2003年		2004年			
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	11	12	1			
鉱工業生産	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
所定外労働時間	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
全国百貨店販売	☁	☁	☂	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁
乗用車 新規販売台数	☂	☂	☁	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
主要35社・ 旅行販売	☂	☁	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
機械受注 (除:船舶、電力)	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
公共工事・ 着工金額	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
新設住宅・ 着工戸数	☂	☁	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
輸出・数量指数	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂
マネー・サプライ	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂	☂

注1：天気マーク☂は前年比4%以上、☂は前年比0%～4%、☁は前年比-4%～0%、☂は前年比-4%超を基準にしている。

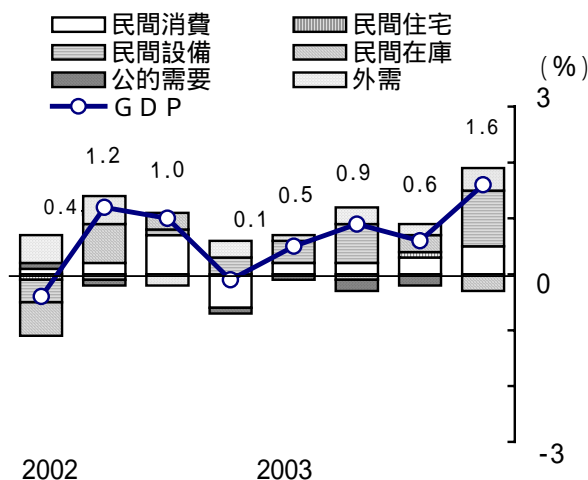
注2：四半期別推移 ☂は1～3月、☂は4～6月、☂は7～9月、☂は10～12月。

注3：月別推移は異常値補正のため、前月、前々月との3ヵ月平均値を使用している。

注4：各指標の数字は2004年3月9日時点での入手可能なデータに基づく。

実質国内総支出と内外需別寄与度の推移(前期比) 単位: %

	2002					2003				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
GDP	0.1	0.5	0.9	0.6	1.6	0.1	0.5	0.9	0.6	1.6
民間消費	1.1	0.4	0.3	0.5	0.9	1.1	0.4	0.3	0.5	0.9
民間住宅	0.7	0.9	0.1	2.9	1.0	0.7	0.9	0.1	2.9	1.0
民間設備	2.2	2.4	4.6	0.0	6.3	2.2	2.4	4.6	0.0	6.3
政府消費	0.1	0.4	0.1	0.7	0.4	0.1	0.4	0.1	0.7	0.4
公共投資	1.7	3.1	3.7	5.2	0.7	1.7	3.1	3.7	5.2	0.7
輸出	3.4	1.3	1.6	3.3	4.6	3.4	1.3	1.6	3.3	4.6
輸入	1.3	0.8	1.1	2.6	1.9	1.3	0.8	1.1	2.6	1.9
寄与度										
国内需要	0.3	0.5	0.6	0.4	1.2	0.3	0.5	0.6	0.4	1.2
民需	0.2	0.6	0.8	0.6	1.2	0.2	0.6	0.8	0.6	1.2
外需	0.3	0.1	0.3	0.2	0.4	0.3	0.1	0.3	0.2	0.4



円高一服、回復持続に期待高まる日本経済

10～12月期は13年半ぶりの高成長 - 2004年度も実質2%成長予測が大勢
2月上旬のG7で為替安定が謳われ円高の流れが一服する一方、2003年10～12月期の実質成長率が年率6.4%と13年半ぶりの高成長を記録するなど、順調な景気回復への期待が広がっている。

3月10日に内閣府が発表した10～12月期のGDP速報（二次速報）では、実質成長率は前期比1.6%と4四半期連続のプラス成長となり、名目成長率も前期比0.4%増となり3四半期連続プラス成長となった。内訳をみると消費が前期比0.9%増、設備投資が同6.3%増と内需が着実に拡大したほか、輸出も伸びを高めた。この結果、1～3月期が横ばいでも、2003年度は政府見通しを上回る2.8%成長となり、名目でも3年ぶりのプラス成長が確実となった。

各機関の見通しでは当面、輸出と設備投資にけん引され、2004年度も実質2%台の成長が見込まれている。ただ、年度後半のシナリオについては、米国はじめ海外経済の減速で調整局面を迎えるとの見方と、回復が家計にも波及し始め堅調に推移するとの見方に分かれている。

雇用・消費関連指標は改善 - 生産・設備投資関連指標は急伸一服

最近の経済指標をみると、1月の鉱工業生産は前月比3.4%増と2ヵ月ぶりプラスとなったものの、予測指数では2月は4.1%の大幅減、3月は0.7%増と、2003年後半の急回復ぶりは一段落してきた。設備投資の先行指標とされる機械受注（船舶・電力除く民需）も10～12月期の大幅増からの反動で、1～3月期は同0.2%減が見込まれるなど、企業の先行き見通しには慎重さも残っている。

一方で、1月の失業者数は8ヵ月連続減少、就業者数は2ヵ月連続増加、有効求人倍率は約10年半ぶりの高水準と雇用情勢も改善してきた。1月の家計消費支出も実質1.3%と3ヵ月連続プラスとなり、家計部門への回復波及の期待も高まっている。2月の街角景気調査でも景況感は改善してきた。

グローバルとデジタルを両輪とする今回の景気回復が、ドメスティックでアナログな分野に広がるか、株式市場などでも期待は高まっている。 【松尾・長谷川】

回復感強まる米国・アジア、ユーロ高懸念根強い欧州

米国：製造業中心に回復持続の見通し強まる

米国では、大統領経済諮問委員会が景気回復は2004年には持続的な拡大軌道に乗り4%成長と見通す一方、FRB（連邦準備理事会）のグリーンズパン議長も議会証言で「経済の先行きは明るく、今後も景気拡大は持続する」との見通しを示すなど、持続的な景気回復に自信が深まっている。

最近の経済指標をみると、1月の鉱工業生産は前期比0.8%増となり、設備稼働率とともに8ヵ月連続で上昇している。需要の伸びに比べて在庫は低水準で、原材料価格が上昇気味なことから、今後も生産は強含みで推移すると見込まれている。1月の耐久財受注は2ヵ月ぶりにマイナスとなったが、製造業の景況感では5ヵ月連続で上昇しており、新規受注判断指数は高水準を維持している。

一方、小売売上高や住宅着工は高水準が続くものの、10～12月の反動から1月はマイナスとなった。消費者心理には雇用動向への不安も残っており、2月の雇増ペースが期待外れに終わるなか、消費者心理の行方が注目される。

大統領経済諮問委員会、FRBの2004年の経済見通し（単位：%）

	実質GDP	インフレ率	失業率
経済諮問委員会	4.0	1.2	5.6
FRB	4.5～5.0	1.0～1.25	5.25～5.5

注：実質GDPとインフレ率は2003年第4四半期 2004年第4四半期の伸び率

ユーロ高への懸念根強い欧州 - アジアの輸出型製造業は明るい見通し

欧州では、10～12月期の成長率がドイツやフランスでも2四半期連続プラスとなったものの、純輸出はマイナスでユーロ高への懸念も広がっている。ドイツでは、失業率が悪化し個人消費が低迷するなか、頼みの綱だった企業景況感も2月は10ヵ月ぶりに悪化しており、ユーロ高・ドル安是正への声も強まっている。

アジアでは、鳥インフルエンザの影響への懸念はあるものの、製造業を中心に見通しは明るくなっており、台湾やシンガポールでは2004年の見通しは上方修正されている。高成長が続く中国では、2004年も電力不足の深刻化が見込まれるなか、政府は投資や貸出への抑制姿勢を強めている。 【松尾・長谷川】